神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

# 大相撲のパースペクティヴースポーツのグローバル化と伝統ー


| メタデータ | 言語: Japanese |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2017-12-22 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 船井, 廣則, FUNAI, Hironori |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2343 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

# 大相撲のパースペクティヴ
# —スポーツのグローバル化と伝統—

船井　廣則
21世紀スポーツ文化研究所主幹研究員

## はじめに

この小論に先立って、統一テーマ「ポスト・グローバル化社会におけるスポーツ文化研究」のもとに一昨年刊行された竹谷和之編『神戸市外国語大学 外国学研究』Vol.91 2015 に、「『記・紀』に見る伝統スポーツ」（p.111-123）を寄稿している。これは、古代日本の史書（神話）に現れた相撲の記述の分析を通して、古代人がスポーツ現象にどのように向き合っていたのかを明らかにすることを試みたものであった。その執筆の動機は、シルクロードや海上の道(1)を経てもたらされた相撲が、古代日本においてどのように受け入れられ定着していったのかを知ることを通して、今や、そこかしこに綻びを露呈している近代スポーツが、グローバル化の波をくぐり抜けた後にたどる道筋を見いだす手がかりが得られるのではないか、との微かな「見込み」があったからである。

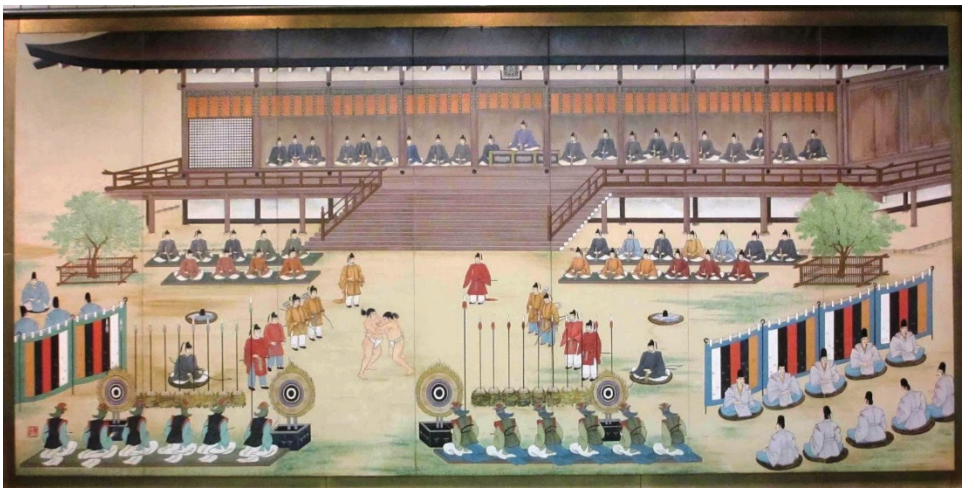
それから 1 年余を経た今回は、古代から近世・現代へと視線をずらして、日本の伝統的スポーツとされている「大相撲」に着目することにした。西欧をゆりかごとする近代スポーツが中心となっている現代日本のスポーツ・シーンにおいて、今なお各種メディアにその登場スペースを確保し、年 6 度の本場所興行にも多くの観客を動員(2)しているのが現在の大相撲である。かたくなに伝統を守り続けるこのスポーツ文化が、グローバル化の行き着いた現代社会の中ではいかなる位置を占めているのであろうか。近代スポーツが基本的な原理として持つ過度の競争主義のために自壊しつつあるなかで、日本の相撲史を振り返ることを通して、ポスト近代スポーツのオルタナティヴとしての可能性を検討してみたい。

## １．大相撲の起源

本稿のタイトルにも使用している「大相撲」という名辞は、職業的な力士と興行のマネージメントに携わる関係者とによって実施される、営利事業としての相撲を指していることをあらかじめことわっておく。この大相撲が組織化され、庶民向けの興行として成立したのは江戸時代であるが、その淵源は神話の

時代まで遡る[3]。寒川恒夫は相撲の淵源について、「記紀」の記述と古墳より出土する力士埴輪と、5 世紀後半〜6 世紀にかけて支配者層の文化としての葬礼相撲の存在を想定しており、これも日本の相撲のルーツのひとつとしている[4]。もちろん、これに先立って、一般庶民の間ではそれまでも素朴な力比べや、豊穣儀礼と結びついた行事として相撲が行われていたのではあろうが、当然のことながら彼らの記録は残されてはいない。

「記紀」が成立した 8 世紀頃になると、宮中では支配地域から力士を招集して天皇の前で競わせる、服属儀礼の性格を持つスポーツ・イベントが登場する。それは「相撲節会」という名称で定期的に実施されるようになるのだが、こうした宮中のイベントは官僚制を伴う中央集権的政権の成立を待ってはじめて可能になる。これによって記録が残され、その様子も後代に伝えられることができたのであった。そして、こうした古代の相撲節会の諸要素を取り入れることによって成立したのが大相撲である。図 1 は平安時代に行われた相撲節会を再現したもので、両国国技館フロントロビーに展示されている。



【図1 相撲節会再現図】

画面上辺の建物内で、中央の一段高くなった座席で観覧しているのが天皇。陪臣たちはそれぞれの位階に応じた場所に着座している。画面中央には組み合う力士が描かれ、その周りを 12 名の武人が見守る。手前に並ぶ人びとは雅楽の演奏者たちで、相撲と同時に歌舞も行われていたことがわかる。

上述のように、相撲節会は宮中の人びとの娯楽であっただけではなかった。それは天皇の権威を認め服従する儀礼の役割を果たしていた。つまり、天皇の

支配システムのひとつとしての機能を有していた[5]。それゆえに、天皇の支配権が弱まり戦乱の続く時代になると相撲節会も継続的開催が困難となり、天皇に替わる支配者である武士が台頭する 12 世紀後半にはその姿を消した。

もっとも、節会相撲に限定せずに見れば、相撲は平安時代を通して天皇や貴族の専有物というわけではなかった。11 世紀に入ると寺社の祭礼の際に境内で奉納する相撲も開催されるようになった[6]。奉納相撲の観客は、第一義的には神や仏であるが、当然のことながら、これを実際に楽しんだのは信者たる一般庶民たちであった。また、この奉納相撲に出場した力士は、当時開催が稀になってきていた相撲節会の出場者と重なってもいたといわれる。

鎌倉幕府の成立によって武家社会の基礎が固まった 12 世紀末、相撲人気は従来の京都中心から関東地方への広がりを示すようになってゆく。13 世紀中葉に鎌倉市中での辻相撲が禁止された例[7]は、時の権力者が市中の安寧秩序の

**【図2 鴨川遊楽図屏風部分辻相撲】**

維持に配慮せねばならないほど庶民の間でも相撲人気が高まっていたことをうかがわせる。図 2 は 17 世紀に描かれた祇園祭礼図と組み合わされた屏風の一部である。これは投げ銭目当ての興行としての辻相撲ではなく、脱いだ衣服や刀を童児が運んでいる様子などから、即興的に始まった力自慢の素人たちによる辻相撲を描いたものと思われる。

## ２．営利勧進相撲興行の成立

天皇に替わって統治者となった武士たちも相撲との関わりを深めていく。戦国時代であればこそ、武人が身につけるべき格闘術、あるいは精神を鍛錬する手段として相撲が奨励されたであろうことは想像に難くない。しかし、そうした実用的な側面だけが重視されたのではなかった。織田信長や豊臣秀吉など、戦国大名たちが相撲見物を好んだという記録が残されている。このことは、この時期に相撲は専門的な力士たちの演じる「芸能」の域に近づいていたことを示している。つまり、身分の高い武士たちを満足させる娯楽としても存在し得たのである。

この背景には、祭礼における宗教行事の一部をなす奉納相撲や、見世物や演芸同様に辻相撲が農民や都市の庶民の娯楽として人気を博していたこともあげられるだろう。相撲は身分の別なく人びとに親しまれていたのである。

また、見方を変えれば、かつての支配者が宮中で楽しんでいた娯楽を、今や彼らにとって替わって享受できるという充足感も戦国大名たちに与えていたに違いない。

**【図3 織田信長の上覧相撲】**

図 3 は戦国大名のひとり織田信長が 16 世紀後半に催した上覧相撲を描いたものである。信長は、各地から力士たちを呼び集めて取り組ませ、その中の勝者を家臣として召し抱えたといわれる(8)。図 1 と同じく、これも両国国技館フロントロビー北側に掲げられているのだが、構図や人物の配置などが相撲節会の図に類似していることが分かる。

ところで、戦国時代の頃からそれまで農民や都市の庶民に親しまれていた奉納相撲や辻相撲とは異なる性格の相撲が登場する。それは神社・仏閣の造営や修繕に必要な資金を調達するために開催される勧進相撲である。その最初のものはすでに 15 世紀前半に記録が見られる(9)。これによって営利を目的とした相撲興行への道が拓かれた。またいっぽうでは、前述のように、支配階級である武士の中の有力なもの（大名）たちが、自らが見物を楽しむだけでなく、その権勢を誇示する目的でこぞって力士を雇用した。こうしたことによって、巨躯の持ち主や力自慢の若者たちが生業として力士を選択することが可能となった。力士の専業（プロ）化である。

### ３．伝統の創造と吉田司家

17 世紀に入って戦国の世から徳川の治世へと移り、世の中が安定すると都市ではさまざまな文化が花開いた。なかでも当時世界有数の大都市であった江戸に暮らす人びとのエンターテインメントとして人気が高かったのは、入場料を払って観る芝居や見世物であったが、勧進相撲もこれに加えることができる。これらに共通していたのは、普段から人びとの多く集まる信仰の場所である寺社の境内を借りて興行することが一般的であったことである。

すでに述べたように、相撲は農村においては豊作を祈願する宗教行事として行われており、都市においては娯楽のひとつとして人びとに親しまれるようになったのだが、いずれも宗教的空間と結びついていたことに注目しておきたい。

初期の勧進相撲には、投げ銭目当ての辻相撲と大差のないものもあり、むしろ喧嘩騒ぎがつきものの荒っぽさが興行としての売りものであった。そのため、巨躯や腕力にものを言わせて町中で乱暴を働く力士や力士くずれも少なくなかった。ゆえに彼らは幕府の取締対象となった。

1648（慶安元）年の禁止令以後、18 世紀前半までしばしば勧進相撲興行は幕府によって厳しく取り締まられた。ただこの場合、大名たちに召し抱えられた、言い換えれば、身元のしっかりした力士たちによる勧進相撲については禁止を免れた。武士のコントロールから外れた無頼の集団による興行と見做されたものが規制されたのである。このため勧進相撲は一次的にその中心が江戸から京都・大阪に移動するという現象も生じた。

勧進相撲で生計を立てる興行主や力士たちは幕府の規制・圧迫をかいくぐる

ために、相撲の作法や決まり手などを整備し、興行組織も芸能者集団としての体裁を整えることによって幕府の許可を得やすいように自らを変容していった。こうした努力により存亡の危機を乗り切った営利勧進相撲は、18 世紀の中頃には江戸・京都・大阪での三都四季勧進相撲体制を形成するまでに発展し、歌舞伎などとともに武家のみならず庶民の娯楽として浸透・定着していったのである。

この営利勧進相撲発展の過程で大きな影響力を発揮したのが、代々当主が吉田追風を名乗る吉田司家であった。そもそも吉田司家は過去に遡れば、公家の二条家に仕え相撲節会の行司官を勤めていた家系であった。それゆえ、古代の宮中における礼式や決まりごと（有職故実）に通じていた。17 世紀の半ばに吉田司家は、当時の有力な力士たちがそうであったように、熊本の大名細川家に召し抱えられた。いにしえの相撲節会行司官の子孫が地方領主に仕えるという事象そのものは、相撲文化をパトロネージする支配層の、天皇から武家への、交替をあらためて確認するものでもあったといえよう。

そしてまた、吉田司家が何代にもわたって保持してきた相撲の礼式や決まりごとは、他の行司家との差別化を際立たせる「正統性」を担保する素材でもあった。それはまた、無頼のものたちがただ巨躯や腕力にものを言わせるだけの素朴な格闘技であった相撲を、洗練された「芸能」にまで高める効果をもたらしたのである。吉田司家はこの正統性を武器に、18 世紀後半には他の行司家や「年寄」(10)を従え、相撲興行集団の頂点に君臨するようになる。そして力士の最高位である「横綱」を発明し、その免許授与権を確保したこと、将軍の上覧相撲で行司をつとめたことなどによって、19 世紀に入ると幕府より江戸相撲取締を任命されてその権勢を誇った(11)。

図 4 は 19 代吉田追風より 63 連勝の記録をもつ大力士であった 2 代目谷風梶之助に、与えられた横綱免許である。これと同じものが谷風の好敵手小野川喜三郎にも同時に与えられた。

【図4 吉田司家が谷風に与えた横綱免許状】

こうした吉田司家による一元的な故実伝授・相撲集団統制システムの構築は、いっぽうでは幕府にとってもメリットがあった。というのは、当時幕府は力士くずれの無頼漢や浪人の取締りに手を焼いていたという事情を抱えていたからである。江戸の勧進相撲興行集団は時の権力である幕府の意向に寄り添う形でその利権を得ていたといえる。

## 4．大相撲の成立

相撲の営利興行集団の組織化が図られ、公共の秩序維持が担保されると、幕府は深川八幡宮境内で行われる勧進相撲に許可を与えた。1778（安永 7）年のことである。これが江戸大相撲と呼ばれる興行の最初のものとされている。後に開催場所が両国回向院へと変わっても寺社の境内、すなわち屋外で実施することに変わりは無く、雨天時には取組はできず、あくまで「晴天 10 日」の興行であり、この方式が定着していった。

図 5 は開催場所が両国回向院に移ってからの大相撲の賑わいを描いた錦絵である。1853（嘉永 6）年に浮世絵師歌川国郷によって制作された。

【図5 歌川国郷　両国大相撲繁栄之図】

吉田司家によって古代の礼式や決まりごとが再現されたことは上で述べた。それらは大相撲にも反映されたのだが、それらの他に相撲節会には見られなかった新たな要素も付け加えられた。

そのひとつは相撲の競技場としての土俵である。江戸時代の行司の著作によれば、土俵は「天正」から「慶長」の頃に作られるようになったとあるので、それまで存在しなかった土俵が登場するのは 16 世紀末から 17 世紀初めと推測されるものの、その形や大きさなどの詳細についてはさだかではない[(12)]。重要なことは、土俵が勝敗のルールの基準ともなっていることである。すなわち、力士の身体が土俵の円外に出されてしまうか、たとえ土俵内であっても、足裏以外の身体部位が地面に触れてしまえばその力士の負けと判定されるからだ。

ところで、大相撲成立の少し前のころには、現在使用されているものよりやや小ぶり（直径 3.94m）の円い土俵が作られていたことが分かっている。ちなみに、吉田追風は土俵についてもエピソードを残している。すでに上で触れた将軍上覧相撲（1791 年）の前日に一夜で土俵を作ったというのがそれであるが、これも小ぶりなものであったと思われる。

幕末期の浮世絵師歌川邦照は大相撲の土俵入りを描いているが、それによれば三階層になっていたといわれる観客席のようすや、土俵上に付属構造物があったことがよく分かる。その構造物とは、土俵四隅の四本柱と屋根である。四本柱にはそれぞれ竜・朱雀・白虎・玄武の四神を象徴する、紫・赤･白･黒四色の布が巻かれており、これによって支えられた切り妻屋根が露天の土俵を雨から守っていた。

ちなみに、この四本柱は 1953 年 5 月から始まる TV 中継にそなえて、その前年に撤去された。その上の屋根はといえば、室内競技場である国技館の落成以来とうにその実用的な意味を失っていたが、天井からつるされる形式に変更されて今も存続している。

また、現在の大相撲で使用されている土俵であるが、それは一辺が 6.7 メートルの正方形に土が盛られた上に 16 個の勝負俵で直径 4.55m の円が作られ、その円の東西南北 4 ヶ所に 4 つの徳俵と呼ばれる出っ張りが設けられているのだが、その形状と大きさは 1931（昭和 6）年以来、第二次大戦直後の一時期を除いて変わってはいない。

こうしてみると、土俵は勝負を判定する基準であり、技の巧みさや決まり手

の多様性を創出する「装置」であるとともに、360 度全方位からの視線を受け止める「舞台」でもある。それゆえに、世界の多くの民族が古くから伝承してきた素朴な徒手格闘技にすぎなかった相撲を、鑑賞に値する「芸能」へと高める役割を果たしたといえる。

そしてふたつには行司である。古代の相撲節会にも見られた行司(13)であるが、その役割は、土俵上で力士たちの立ち合いや勝負の進行を司ることである。近代スポーツにおけるレフェリーと同じように勝者の判定も行うが、微妙な勝敗の最終的な判定は、元力士による勝負審判員の協議で決定され、行司にその権限は与えられてはいない。これは現代にも継承されている大相撲の特徴のひとつといえよう。

さらにもうひとつあげるとすれば、「番付表」の発明を加えることができる。番付は大相撲における力士の序列を表したものである。相撲人気の高まりにつれて、興行の概要をあらかじめ知りたいという見物客の要望に応えて、木版による大量印刷が行われたのである。当時人気のあった相撲絵（浮世絵）と併せて、スポーツとメディアの親和性をここに見ることもできるだろう(14)。

番付表中央最上部に書かれた「蒙御免」の文字は、その興行が幕府から許可を得たものであることを示しているのだが、18 世紀半ばに発行されたのと同じものが 250 年以上を経た今日も使われている。この番付表を模倣して、「名所番付」や「長者番付」など、さまざまなものの優劣を序列化した番付表が作られたが、そうした心性は現代の日本人の中にも浸透している。

18 世紀後半に成立した大相撲は、その興行場所や期間の相違を除けば、それほど大きな変更を受けずに現代に至るまでその伝統を受け継いできているといえる。

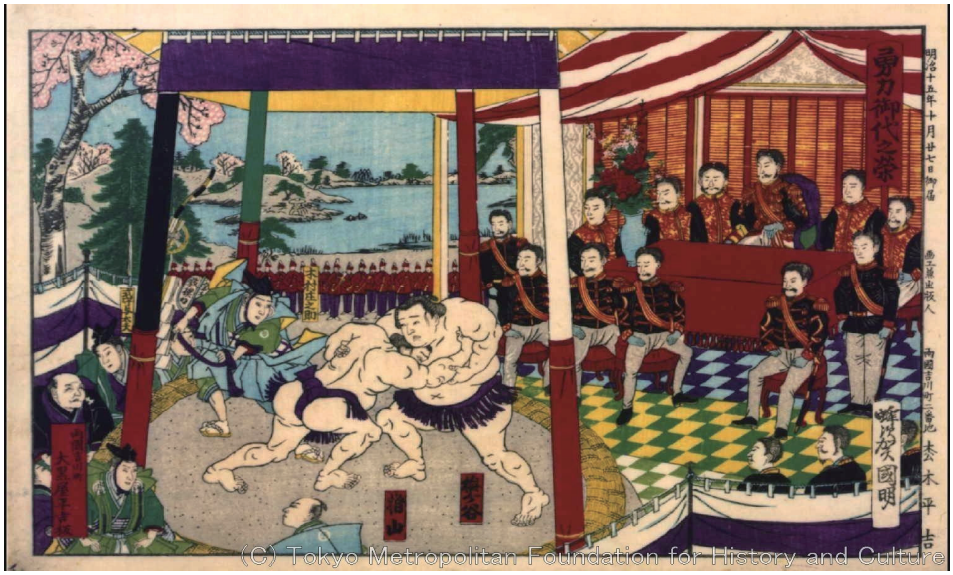
## ５．ナショナリズムと大相撲

270 年余り続いた鎖国下での幕藩体制の終焉と、明治新政府の樹立と開国という歴史の大転換期を迎えて、大相撲も新しい時代への対応を迫られることになる。とりわけて、近代化＝西欧化を目指した政策が矢継ぎ早に出された明治初期においては、封建時代の遺風を体現したような大相撲は、明治初期の文明開化という世相風俗による逆風にさらされた。

断髪令や東京府裸体禁止令の公布などをそうした逆風の例としてあげるこ

とができる。大銀杏を結い、廻しひとつの裸体で相撲を取る力士とその元締めたる興行主たちにとって、こうした新興国日本の前のめりの西欧化は脅威であったと思われる(15)。

また、新政府が天皇を頂点とする中央集権国家を目指して実施した廃藩置県（1871 年）の施策も大相撲の営業システムに影響を与えずにはおかなかった。というのは、廃藩置県によって領地を天皇に返上し、東京に移住させられた旧藩主たちのなかには、参勤交代の大名行列に随行させるなど、これまで自らの権威を誇示する道具としても利用してきたお抱え力士を解雇するものもいたのである。パトロンを失った力士たちは、生計の道を興行収入だけに頼らねばならなくなっていた。こうした不遇の情況を払拭するきっかけを大相撲に与えた




【図6 歌川国明　勇力御代之栄】

のは、明治天皇の東京芝浜離宮での天覧相撲開催（1884 年）であった。天覧相撲は、じつはこの時までに 1868 と 1872 年の京都、1881 年の東京とすでに三度も開催されており、天皇の相撲愛好は周知の事実であった。図 6 は浜離宮延遼館での天覧相撲を描いた錦絵である。画面右上部の玉座に着座する天皇が描かれている。

天覧相撲のようすが、こうした錦絵や新聞報道によって庶民に広く伝えられたことによって大相撲の集客力は回復に向かったと言われる。加えてこの時期

には、西南の役で西郷軍に与して敗れたことで一次的に求心力を失っていた吉田司家も、人気力士梅ヶ谷の横綱免許授与にあたって復活する契機を得ていた。

もともと神事相撲の要素を取り入れて伝統を強調してきた大相撲は、代々神事を司ってきた天皇の観覧の機会を得たことによって、さらにそのプレステージを高めることができたと言えるだろう。

ところで、相撲が「国技」だという言説が広まったのは江戸時代のことではなく、天候に左右されずに興行が可能となった常設館が建設（1909 年 5 月竣工）されたのちのことである。前述のごとく、かつての勧進大相撲は露天での「晴天 10 日」興行であったので、期間中雨で取組が順延されれば通算の興行日数は増える。それは力士や興行主の収益減につながった。待望の常設館は江戸時代以来の興行場所である回向院の境内に建設され、これが「国技館」と命名された。この名称は新設常設館のための初興行披露状の文中で、古代の相撲節会に起源があることを根拠に「相撲が日本の国技」と述べていることから採用されたという(16)。ここにも皇室との関わりの深さを印象づける意図が見られる。また、大規模な対外戦争である日清戦争 1894 と日露戦争 1904 に辛くも勝利したことによるナショナリズムの高揚が、他の名付けの候補を退けて「国技」の文言を選択させたといえなくもない。

また、1925 年に皇太子時代の昭和天皇からの下賜金をもとに、現在の天皇賜杯が創られたことにもまた大相撲の皇室との関わりを誇示する意図が感じられる。同じ年に東京・大阪両相撲協会が合併して財団法人大日本相撲協会が設立されたが、この財団法人化には見世物興行組織では天皇賜杯を扱うことができなかったからだとされている。ちなみに、この大日本相撲協会初代会長には陸軍大将福田雅太郎が就任した。

これら一連の出来事によって、いまや大相撲は単なる営利興行団体から、国技の普及・教化団体という「国家的保護」を期待できる地位へと上昇した(17)。これは、立場を変えてみれば、天皇に奉仕する兵士としての国民の修行の道、すなわち「相撲道」を掲げる役割を国家から求められることにもなる。ちなみに、財団法人としての認可がおりた大日本相撲協会寄付行為の第二章第二条には、その目的として「本協会は本邦固有の国技たる相撲道の深遠なる研究に勉め、之が維持興隆を期すると共に武士道の精神に則り、質実剛健なる国民の養成と体育の向上とを図る」ことをあげているのは、そうした国家の要請に応えたもの

と言えよう。

以上をまとめると、明治以降の大相撲が江戸時代の「勧進興行相撲」から様変わりした大きなポイントとしては、国技の表象（シンボル）にふさわしい装置として大相撲が改変されたことをあげることができる。

## ６．グローバル化と大相撲

第二次世界大戦の終結によって、天皇の兵士を錬成するという軍国主義的イデオロギーは取り除かれたが、その伝統的な「しつらえ」はそのまま継承されている。「国技」としての伝統スポーツの位置付けは今日もなお保持されている。

人類学者の今福龍太は「大相撲のグローバル化」に関連して次のように語っている。「相撲の普及とか国際化というのはあくまでも相撲のインターナショナリゼーションや普遍化ではなくて、日本の「国技」というものを外に向けて拡大延長していくという、その神話的精神を外延化するという、そういう動きにむしろ近い」(18)と述べているのだが、このようなとらえ方は、大相撲の将来を見通すにあたって重要な示唆を与えてくれている。

つまり、柔道のようにオリンピックやワールドカップといった欧米生まれの近代スポーツ・サークルに取り込まれ、それに順応していくのでなく、大相撲は自らが創り出した日本の伝統を表象する独自の「芸能」としての道を進むべき、と理解できるからである。

ところで、2016 年 7 月の名古屋場所番付表を例としてあげると、幕内に名を連ねる日本人以外の力士は 13 名で全体のほぼ 1/3 を占めている。さらに十両以下には 25 名の外国出身の力士が入幕を目指して控えている。日本相撲協会傘下の相撲部屋の数は現在 44 を数えるが、その中で外国出身力士が在籍していない部屋は 10 部屋で 23%にすぎない。詳しく見ると、1 部屋 1 人の人数制限があるにもかかわらず、2 人以上の外国出身力士が在籍している部屋もある。これは日本国籍を取れば外国出身枠が空いたと見なされていた時期の入門であったり、閉鎖された他の部屋から受け入れたりしたためだとされている。

本稿執筆時点における横綱 3 名は全てモンゴル出身。貴乃花引退以後 13 年におよぶ日本人横綱の不在。この現状を見れば「これが国技と呼べるのか」という声があがるのは無理もない。そうはいっても、大相撲はこれまで幾たびも存亡の危機に見舞われながら、その都度柔軟に対応して延命を図ったのはみて

きたとおりである。しかし、今回の危機はそれまでとは少し質が異なるようである。大相撲は戦前からの観るスポーツの代表格として、庶民の人気を背景に後継者のリクルートにさほど苦労はせずにきたのだが、ここに来て後継者の確保が難しくなったのだ。

日本人兄弟横綱の若・貴ブームに沸いた 1992〜3 年には、それでも年間 200 名を超す新弟子が集まっていたが、2006 年からは２桁止まりが続き、2011 年以降に至っては二次検査を含めたとしても 100 名に届かない状態になっている。しかも、これは外国出身者を含めての数字である。少子化や進学率の高まりに連れて、中卒で相撲部屋に入って修行するという旧来の力士養成のコースを選択する若者が激減したことや、見た目の格好良さや高収入が期待できるプロスポーツのライバルたちがつぎつぎに登場してくる中で、日本国内では大相撲の若者を引きつける魅力が相対的に低下していったことが原因としてあげられる。

この状況を打開するために、相撲協会が採用して成果を上げた戦略のひとつが、海外の若者を招いて不足する力士を補充することであった。その際、外国出身者には大相撲が創りあげてきた伝統と格式・権威を遵守させる努力が払われている。そしてまた、そのことが今日直面している危機を乗り越える「鍵」だと信じているようにも見える。それゆえにこそ、伝統･格式・品格といったものからの逸脱には鋭い目が注がれる。そしてそれは相撲協会のみに限ったことではなく、マスメディアにおいても同じようなスタンスを見ることができる。

モンゴル出身の横綱、朝青龍の角界からの排除はそうした事情をよく物語っている[19]。あるいは逆に、白鵬の日本人的な態度、振る舞いや発言が折に触れてマスメディアに取り上げられるということも、逸脱の烙印を押され放逐された朝青龍とはコインの裏表の関係と見ることができるだろう。

ようするに、これは相撲を取る人間の出身地・国が問題なのではなく、大相撲を大相撲たらしめている「装置」や「所作」が最重要視されているということなのだ。この戦略は今のところ一定の成功を納めているといえる。うがった見方をすれば、モンゴル出身の白鵬の強さが際立っていればいるほど、日本人横綱を待ち焦がれるファンの熱を上昇させて大相撲人気を煽ることができるし、若手の有望な日本人力士の登場、たとえば遠藤のような、は同じ文脈でファンの期待を膨らませるのであるから。

では、今あげた大相撲を大相撲たらしめているその「装置」や「所作」とはなんであろうか。ここでそれらのいくつかを確認しておくことにしよう。まず「土俵まつり」と「弓取り式」、そして「土俵入り」は、ともにすでに述べた将軍家斉の上覧相撲があった 1791 年前後に、吉田司家が創案したものと言われている[20]。図 7 は東洲斎写楽が土俵入りを描いた浮世絵を切手にしたもの。ここに描かれている大童山はわずか 7 歳にして身長 120cm、体重 71kg、ウエスト 109cm あったという怪童で、当時相撲の対戦はせず、土俵入りだけを見せていたと言われる。

【図7 大童山土俵入】

番付が十両以上の力士が結う特徴的な髪型である大銀杏もまた江戸期からのものである。現在、外国出身で縮れ毛の力士にはストレートパーマをかけてまで、このまげを結わせているといわれ、伝統の維持には並々ならぬ努力が払われていると言って良いだろう。

土俵上の屋根の形式は 1932 年に入母屋造から神明造に替わり、国家神道との関係が強調されるようになった。また、力士が土俵上で柏手（かしわで）を打ち、四股（しこ）を踏む所作も、前述のように相撲節会以来連綿と伝えられている神事に関係するもので、神を呼んだり邪気を払ったり、大地の邪悪な霊を踏み鎮めるといった宗教的意味が持たされている。

## まとめにかえて

外国出身力士にたいする処遇に見るように、大相撲はグローバル化の波に迎合して近代化を遂げ「普遍」を目指すのでも、逆に文化財保護を任じて伝統の中に引きこもるのでもなく、いわば近代化と伝統保持のハイブリッドなスポーツ的芸能として独特な立ち位置を占めていると見做すことができる。

確かに、こんにちまで伝承されてきたスポーツを保護・温存していくことも選択肢のひとつではあろう。だがしかし、M.B.スティーガーの言うように、ハ

ワイのピジン英語や、キューバ風中国料理など、ハイブリッド（あるいはクレオール）な現象に肯定的なまなざしを向けることもひとつの選択肢として有効だと思われる[21]。合理的・経済的に整理しきれない、普遍化できない要素を保持しつつ、いっぽうでトランスフォーマティブな力を発揮することによって、大相撲は今後もしたたかにその存在を主張し続けていくであろうことが、これまで見てきた相撲の歴史からうかがわれる。

いっぽう大相撲と同じ競技形態ではあるが、そこから伝統的な要素を排除して近代スポーツの仲間入りしたものにアマチュア相撲がある。こちらは大相撲とは異なり、すでに世界規模の連盟を持つとともに、海外にも少なからぬ競技人口を有し、女子選手も組織化してオリンピック種目となることを目指している。このアマチュア相撲の動向とプロ集団である大相撲との関係にはいくつかの興味深い問題を取り上げることができようが、これについては今後の課題としたい。

**【注解】**

(1) ここでは文物伝播の道のひとつという意味で使っているが、もちろん日本文化の源を沖縄を通して南方に求め，日本民族の渡来について著した『海上の道』（柳田国男 1961）を念頭においている。

(2) 2015（平成 27）年の本場所観客動員数は開催地によって多少の差があるものの、775,160 人を数えた。経産省による 2010（平成 22）年を 100 としたスポーツ産業活動指数によれば、大相撲は若高ブームに沸いた 1997（平成 9）年頃までは 150 ほどの高いレベルを維持していたが、野球賭博や八百長問題が影響した 2011（平成 23）年には 60 にまで落ち込んだ。しかし、これを底にその後上昇基調となり、2015（平成 27）年には 130 ほどまで回復してきている。民放各局が撤退したため、TV 生中継は現在では NHK1 局となっているが、2016（平成 28）年度の TV 視聴率を見ると、本場所開催中は 12.6～16.0 を記録している。年間を通して相撲は常にサッカー・プロ野球・ボクシングを上回っており、その人気の高さを知ることができる（ビデオリサーチ社「2016 年度週間高世帯視聴率番組 10」）。また、国外においてもアジア・オセアニア・中南米・地域では NHK ワールドプレミアムを通じて衛星で生中継が行われているし、ヨーロッパ（JSTV、ESPN）や北米・ハワイ（TVJapan）でも相撲放送を見ることができる、というように今日では相撲ファンは日本国内に留まらない。

(3) すでに「『記・紀』に見る伝統スポーツ」、『外国学研究』Vol.91（2015）所収において詳述した建御名方神（タケミナカタ）と建御雷神（タケミカヅチ）の「力競」や、野見宿禰と当麻蹶速の「捔力」と呼ばれていたものがそれである。

(4) 寒川恒夫編　『相撲の宇宙論』　平凡社　1993　p.35　参照。

(5) 寒川恒夫編　上掲書　p.45　参照。

(6) 1027（万寿 4）年石清水放生会の相撲奉納が最初。賀茂祭では 1111（天永 2）年が初見。1137（保延 3）年には春日若宮祭で最初の相撲奉納が行われた。これらは初回以降すべて恒例行事となった。

(7) 町の四辻や広小路で行なわれた相撲で、見物客の投げ銭目当ての職業集団が行うもののほか、素人が集まって行うものもあった。辻では相撲だけでなく、宗教者の説法や勧進、商売や演芸も行われた。

(8) 織田信長の一代記『信長公記』によれば、1570（元亀元）年～1581（天正 9）年の 12 年間に 10 回相撲見物をしていることがわかる。以下に信長相撲上覧の一覧表を挙げておく。

| 巻 | 西暦 | 元号 | 月日 | 場所 | 出場力士数 | 行司 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | 1570 | 元亀元年 | 3 月 3 日 | 常楽寺 | 多数 | 木瀬蔵春庵 |
| 11 | 1578 | 天正 6 年 | 2 月 29 日 | 安土山 | 300 名 | 木瀬蔵春庵、木瀬太郎太夫 |
| | | | 8 月 15 日 | 安土山 | 1500 名 | 木瀬蔵春庵、木瀬太郎太夫 |
| | | | 10 月 5 日 | 二条の新邸 | 記載なし | 記載なし |
| 12 | 1579 | 天正 7 年 | 7 月 6･7 日 | 安土山 | 記載なし | 記載なし |
| | | | 8 月 6 日 | 安土山 | 記載なし | 記載なし |
| 13 | 1580 | 天正 8 年 | 5 月 5 日 | 安土山 | 記載なし | 記載なし |
| | | | 5 月 17 日 | 安土山 | 記載なし | 記載なし |
| | | | 6 月 24 | 安土山 | 記載なし | 記載なし |
| 14 | 1581 | 天正 9 年 | 4 月 21 日 | 安土山 | 記載なし | 記載なし |

*）太田牛一著、中川太古訳　『現代語訳 信長公記』　KADOKAWA/中経出版　2013より作成。

また、1563（永禄 6）年にイエズス会の宣教師として日本の地を踏み、1597（慶長 2）年に没するまで数多くの日本に関する著作を執筆したルイス・フロイスも、その『日本史』の中で信長の相撲好きについて次のように述べている。「彼が格別愛好したのは著名な茶の湯の器、良馬、刀剣、鷹狩りであり、目前で身分の高いものも低いものも裸体で相撲（ルタール）を取らせることをはなはだ好んだ（2・100～101）」　川崎桃太　『フロイスの見た戦国日本』　中央公論新社　2006　p.46

(9) 1419（応永 26）年 10 月に、伏見の法安寺造営のために勧進相撲が開催されたことが、伏見宮貞成親王の日記『看聞御記』に記されている。勧進とは仏教の建物や仏像の建立に寄付を勧めること。

(10) 幕府は相撲の興行主に公共の秩序を維持する責任を強く求めた。これに対して、興行主側は角力会所を設け、力士経験者を「年寄」（大阪では「頭取」と呼んだ）という役職に就けて、興行の安全な運営にあたらせるなどの改善策を講ずることで応えた。

(11) 吉田司家は力士の谷風と小野川に対して 1789(寛政元)年に横綱を免許した。そして 1791（寛政 3）年と 1794（寛政 6）年には、第 11 第将軍家斉の上覧相撲を取り仕切り、作法や礼法など以後の相撲の様式を定めた。

(12) 山田知子（『相撲の民俗史』東選書 1996）によれば、木村孫六『相撲強弱理合書』1673-1681、木村瀬平『角力旧記』1744 に土俵への言及があるという。また、寒川恒夫編　前掲書　p.16f. も参照のこと。

(13) 相撲節会には①力士の東西対抗制、②番付の編成、③力水、④四股踏みの原型、⑤場の浄化(塩槇に相当)とともに、行司･審判の二審制があったとされる。寒川恒夫編　　前掲書　　p.37　参照。

(14) 上に見られるように、寒川はすでに相撲節会で番付が編成されていたとしているが、大関から序の口に至る詳細な階級区分や木版印刷による大量配布に注目するなら、番付表は大相撲の「発明」といって差し支えないであろう。

(15) 正式には「散髪脱刀令」という名称で 1871 年に公布された。しかし、髷を結うことを禁じてはおらず、髪型も帯刀（平民は禁止）も自由にして良いというものであった。また、裸体禁止令や「東京違式註違条例」も大相撲を直接対象としたものでなく、外国人の目に触れさせたくない風俗を取り締まることを意図したものとされる。にもかかわらず、当時の新聞紙上では文明開化に逆行する「蛮風」として、大相撲を廃止すべしとの記事も見られた。

(16) 風見 明『相撲、国技となる』大修館書店　2002　pp.99　参照。

(17) 胎中千鶴「帝国日本の相撲」『現代思想』青土社　2010　11 月号所収　p.184-202　参照。
(18) 稲垣･今福･西谷『近代スポーツのミッションは終わったか』　2009　平凡社　p.207-208　参照。
(19) 横綱朝青龍が、疲労骨折を理由に夏巡業を欠場していたにもかかわらず、モンゴルに帰国してサッカーに興じたことや、本場所開催中に一般人に対して暴力を振るったことなどの問題行動で横綱の品格を損ねたという理由から強制的に引退させられた事件。
(20) 本場所前日に新しい土俵を清め、興行の無事と力士に怪我のないことを祈願し、行司が祝詞をあげる土俵開きが土俵まつり。土俵中央には縁起物の米や塩などを埋める。弓取り式は結びの一番の勝者に代わって、作法を心得た力士が土俵上で弓を受け、勝者の舞を演ずること。土俵入りは力士たちが土俵の上で行う儀式のことで、十両と幕内は当該の力士が全員で行い、横綱は単独で行う。
(21) M・B・スティーガー 桜井他訳『新版グローバリゼーション』 岩波書店 2011　p.90　参照。

**【主要参考文献】**

1　寒川恒夫編　『相撲の宇宙論』　平凡社　1993
2　徳川美術館編　『美術に見る日本のスポーツ』　徳川美術館　1994
3　山田知子　『相撲の民俗史』　東書選書　1996
4　大相撲歴史新聞編集委員会編　『大相撲歴史新聞』　日本文芸社　1999
5　長谷川 明　『相撲の誕生』　青弓社　2002
6　風見 明　『相撲、国技となる』　大修館書店　2002
7　田原八郎　『渡世民俗の精神』　燃焼社　2002
8　飯島和一　『雷電本紀』　小学館　2005
9　川崎桃太　『フロイスの見た戦国日本』　中央公論新社　2006
10　工藤隆一　『力士はなぜ四股を踏むのか?』　日東書院　2007
11　中島隆信　『大相撲の経済学』　東洋経済新報社　2007
12　稲垣･今福･西谷　『近代スポーツのミッションは終わったか』平凡社 2009
13　新田一郎　『相撲の歴史』　講談社学術文庫　2010
14　三田村鳶魚著 柴田宵曲編　『侠客と角力』　ちくま学芸文庫　2010

15　胎中千鶴　「帝国日本の相撲」『現代思想』　青土社 2010　11月号所収 p.184-202
16　玉木正之　『「大相撲八百長批判」を嗤う』　飛鳥新社　2011
17　M・B・スティーガー　桜井他訳 『新版グローバリゼーション』岩波書店 2011
18　太田著、中川訳　『現代語訳 信長公記』　KADOKAWA/中経出版　2013
19　京都国立博物館、朝日新聞社編　『国宝鳥獣戯画と高山寺』　京都国立博物館、朝日新聞社　2014
20　新田一郎　『相撲のひみつ』　朝日出版社　2015
21　船井廣則　「『記・紀』に見る伝統スポーツ」　竹谷和之編『神戸市外国語大学 外国学研究』　Vol.91　2015　所収 p.111-123
22　太田・川角著　甫喜山景雄（編）　『信長公記 川角太閤記』Kindle版 君見ずや出版　2016

**【図像出典一覧】**

図1 両国国技館ロビーの相撲節会再現図：
http://kingbarneyandfriends.blogspot.jp/2013/02/sumahino- sechie.html
図2 徳川美術館編『美術に見る日本のスポーツ』　徳川美術館　1994　p.77
図3 両国国技館ロビーの織田信長上覧相撲：
http://wadaphoto.jp/maturi/wanpakuzumo01.htm
図4 吉田司家が谷風に与えた免許：
http://blog.goo.e.jp/ota416/e/542ed990c2adc1cb16ba23bf967da3b0
図5 歌川国郷　両国大相撲繁栄之図：http://park19.wakwak.com/~edo-rekishisanpo/ryougoku.html
図6 歌川国明　勇力御代之栄：
http://digitalmuseum.rekibun.or.jp/edohaku/app/collection/
図7 大童山土俵入：http://www.yushu.co.jp/shop/g/g120795/

Keywords:　大相撲　歴史　グローバル化